

られ、各章の内容にかんする簡単な「まとめ」はあるものの、「終章」もしくは「結章」等、本全体の結論部分がないが、著者は意図的にそうしたのかもしれない。しかし、宣長の心の細微なゆれを検証した結果、総体としての宣長の思想の本質は何か。「新しい宣長像」はどのように描き直されるべきなのか。愚問と言われるのを承知で著者に問いたいと思う。

以上、指摘した内容には評者による誤解や見落としもあるかもしれないし、見当違いな意見を述べてしまったようにも思う。著者の今後の宣長研究のさらなる進展と、本書の続編を期待してやまない。

（兵庫県立大学准教授）

中川 未来 著

『明治日本の国粋主義思想とアジア』

（吉川弘文館・二〇一六年）

鈴木 啓 考

国粋主義とアジア主義——近代日本においては相反するものとして想起されることも多い二つの思想潮流の交差に対して、本書は新たな理解を試みている。その交差点として、本書は一八九〇年代に活動の最盛期があった東邦協会に注目し、この時期この場を活動拠点として共有した「国粋主義グループ」に属する五人の思想家（稲垣満次郎・志賀重昂・高橋健三・陸羯南・内藤湖南）を素材に、「いかなるアジア認識が、いかにして形成されるのか」（一三頁）を明らかにする、という研究目的を設定する。

近年、政教社や日本新聞社に参集した明治ナショナリズムの担い手たちの、青年期における思想の形成過程に関するまとまった研究成果が出ている一方で、近代日本におけるアジア認識の形成過程に関しては、通時的で包括的な調査に基づく新たな解釈が示されている。明治期の日本ナショナリズムと近代日本

のアジア認識、その形成過程の解明を目的とした研究は、それぞれここ数年でかなりの進展をみたといえるだろう。ただし、本書も指摘する通り、前者においてアジア認識を含めた対外観は、そして後者において一八九〇年代は、必ずしも正面の研究課題でなかった。二つの思想潮流を対象とする研究史の文脈のズレ、方法論の違いがあり、両者の交差についてはこれまで限定的にしか触れられていない。そのため、一八九〇年代に国粋主義とアジア主義が同じ組織に所属した人々によって唱えられしたがって共時的に隆盛したことは周知の事実としても、その形成過程をどのように理解するのかについては、残された大きな課題としてあった。

本書は、この大きな課題と正面から向きあった中川未来氏が、これまでに積み重ねてきた研究業績の集成である。その構成を以下に示す。

序章 国粋主義研究の視角

第一部 国粋主義グループのアジア認識枠組み

第一章 「東方策士」 稲垣満次郎の対外論と地域社会——

「東方論」の構造・伝播・変容

第二章 志賀重昂と稲垣満次郎の南洋体験——アジア主義に

おけるオーストラリア要因

第三章 高橋健三の国粋主義と東アジア秩序構想——人道・

国際法・東亜同盟

補論一 国粋主義と近代仏教——アジア主義におけるインド

要因

第二部 アジア認識の形成とメディア

第四章 「東学党」報道と陸羯南——日清開戦直前のジャー

ナリズム

第五章 内藤湖南の台湾経験——帝国主義状況下の国粋主義

補論二 植民地統治初期の台湾とメディア——『台湾新報』

と『台湾日報』について

終章 明治日本の国粋主義思想とアジア

二

右に示した通り、本書は大きく分けて二部構成をとる。その意図について、著者は序章と終章で繰り返し、以下のように説明している。まず、国粋主義グループの思想は、「①世界各地の国民・民族の文化的多様性を承認し、それぞれに独自の「国粋」を保持発達させることが世界文明への寄与に繋がるという発想」と、「②日本を中心にアジアないし東洋を結集し、西欧国際体系に対抗するという地域秩序構想」の二つが重要な基軸である（二二頁／三二〇頁）。続いて、著者は、「③アジア認識をかたちづくる際に参照される情報がどのような過程を経て主体に辿りつくのかを、新聞メディアの働きを通じて明らかにする／朝鮮や台湾などアジア地域に存在した日本語メディアの役割を重視したい」という「問題意識」をもっている（二二頁／三二二頁）。このうち、第一部が②の把握を課題とし、第

二部は③を主題とする。そして本書全体を通じて①を確認する、ということである。

また、第一章では稲垣『東方策』が刊行された一八九一年、第二章では稲垣の南洋視察があった一八九二年、第三章では高橋が『大阪朝日新聞』入りした一八九三年、第四章では日清開戦直前の一八九四年、そして第五章では台湾領有直後の一八九七年のそれぞれに考察の焦点が当たっており、「全体として緩やかな時系列に沿いつつ」（二二頁）叙述が進む。思想の形成過程を追おうという著者の意図は、こうした本書全体の構成にもあらわれている。

本書の大きな特長は、稲垣、志賀、内藤ら国粋主義グループの思想家たちがそれぞれに直接的な海外体験をもったことを踏まえて、体験からの思想の確立と、その後の展開に至るまでの過程が、史料に即しつつ細かく追認されたことだろう。本書の論及は多岐にわたるが、紙幅の関係上、特に重要と思われる部分を取りあげ、章ごとに紹介したい。

第一章では、ケンブリッジ大学に留学し、その後ヨーロッパ各国を歴訪、アメリカを経由して帰国した稲垣満次郎が、その経験を基に主著『東北策』をまとめたことが論じられた。稲垣の構想の要点は、コミュニケーション手段の整備発達によって、国内的には経済の成長と統一的な国民意識の醸成が進むことを予見した一方で、対外的には世界交通網の結節点に位置する日本が東アジアを中心とする世界市場を掌握できると展望したと

ころにある。その構想に接した京都や宮津など地方都市の実業家たちが敏感に反応し、海外で商機を得ることによって地域振興につなげようと動き出していたことも明らかにされた。ただし、国民意識の統一を志向した稲垣自身は、国内における地域間の利権獲得競争を否定的に捉えていた、という。

第二章では、志賀重昂と稲垣満次郎の南洋航海体験を通じた思想形成の過程が描き出された。オーストラリア連邦独立（一九〇一年）の直前期という時代背景のもと、二人がそれぞれ、現地視察で得た情報から独自の認識をもつに至ったことが確認される。『日本風景論』の著者である志賀は、その環境決定論的発想から、イギリス本国とは異なるオーストラリア独自の「山水」や「風土」がオーストラリア人たちのアイデンティティの拠りどころになると看取した。そこから、将来におけるオーストラリア独立を予見すると共に、日本における国粋主義の妥当性に対する確信を得るに至る。他方、英文著作 *Japan and the Pacific* の著者として英語圏のオーストラリアでも有名だった稲垣は、その知名度を活かして現地の政治家たちと意欲的に交際していた。そこで豪州モンロー主義に触発されたことから、日本を中心とする東アジアモンロー主義を抱懐するに至る。これらは、著者によって「アジア主義におけるオーストラリア要因」（二〇頁）と規定されている。

第三章では、これまでの研究史では中心的に取り扱われたことがない高橋健三の思想遍歴が通時的に概観された。法制官僚

として出発しつつ、やがて『大阪朝日新聞』に転じた高橋も東邦協会の主要メンバーだったからである。ヨーロッパ出張時、実際に西洋社会を観察した経験をもつ高橋は「西洋は利欲の国なり」との認識を得ており、これに対抗するべき規範として東洋固有の「人道」を掲げた。そして、現実には国力の強弱によって適用に不平等が生じている国際法を矯正することが、「人道」を体現する日本に課せられた使命なのだと主張した。このような規範意識は、東邦協会を介して陸羯南など国粋主義グループの他のメンバーたちにも共有されていた、という。

第四章では、日清開戦直前期における「東学党」報道、特に新聞『日本』の陸羯南が報じた東学党イメージが検討された。

なおこの章のみ、現地の直接経験をもたずにメディア情報のみで依拠して形成されたアジア認識が主題となっている。朝鮮に駐在した政治青年たちの「思い入れ」が色濃く反映された現地情報を信頼した結果、陸は当初、東学党を同情すべき「義兵」とイメージしており、その鎮圧に向かう清国軍に対抗して、義兵を支援するために出兵した日本軍の行動を正当化する議論をおこなっていた。だが、そうした構想の全体は、時局の推移と共に完全に失効してしまう。本章の考察によって、日清戦争に至るまでのジャーナリズムによるミスリードの実態が捉え返された。

第五章では、『台湾日報』主筆として約一年間の台湾滞在経験をもつ内藤湖南のアジア認識、特に中国認識の形成過程が捉

えられた。なおこの章のみ、現地で生活しながら形成されたアジア認識が問題となるものの、内藤には漢族系住民や先住民など「異質な他者」との接触がもたらす違和や緊張がさほど見られなかった（二七三頁）という。内藤は現地住民との直接交流からではなく、専ら漢文という文字メディアに依拠して情報を得ていたのである。そんな内藤は、台湾統治のあり方について内地延長主義を唱え、民間日本人の積極的な入植を求めた。彼らによって現地住民の風俗習慣の日本化が促され、それは台湾の文明化に貢献すると信じられたのだった。

三

以上、本書の内容を概観した。各章が、前に引用した①②③の大きな主題に沿った各論となっていることがわかるだろう。割愛した補論一・二の内容も含め、本稿で紹介できなかった論点はこれ以外に数多くある。史料に即した各章個別の分析は精緻であり、当該期の国粋主義グループの活動についてさまざまなことを教えられる。しかしながら、本書を通読し終えて気になった点につき、どちらも全体に関わることなのだが、二点述べたい。

一点目は、各章の分析において五人の思想家の、特定の時期の特定のトピックに関する個人的な思想形成の過程が丁寧に描き出されていた一方で、この五人が東邦協会という場での活動を通じて交差したことによって、集団のなかで新たな思想が立

ち上がってくる過程についての描写があまり見られなかった、ということである。

本稿の冒頭でも示したように、著者は本書の考察対象として東邦協会に着眼し、この場において「いかなるアジア認識が、いかにして形成されるのか」を明らかにする、という研究目的を設定していた。本書は、高橋健三や内藤湖南といった個人の思想形成の過程を個別に明らかにした論文を寄せ集めたもの、というわけではなかったはずである。だから読者としては、例えば、一人の思想家の海外体験が東邦協会という場に参集したメンバーによって間接的に追体験され、彼の意見が賛同を集め、それが契機となって新たな思想が展開する、というような立体的描写を期待する。実際、第一章では、稲垣満次郎の海外経験によつてはじめて獲得された構想が、東邦協会のメンバーに好意的に迎えられることで權威を増し、著作や講演を介して地方の実業家にまで影響を与え新たな思想潮流となり、具体的な政治行動にまで結びつくダイナミズムが、しっかりと描き出されていた。

しかし、第二章以後終章に至るまでの叙述では、そうした場において思想が醸成される過程を追跡しようという著者の構えをほとんど確認できなくなるのである。因果関係の説明なしに、東邦協会のメンバーの誰と誰とが同じような主張をしていた、と確認されるにとどまる。一例として、第三章で高橋健三の思想としてあげられた西洋の「私欲」批判と東洋の「人道」に基

づく規範意識だが、これは著者も指摘するように陸羯南が主唱した国民主義の論理として有名なものであり、その内実については先行論で詳細に検討されている。だとすれば、本書の目的に照らした時、こうしたアジア的な規範意識が、いつ、誰によって、どこからもたらされたのかが問われなければならないかっただけである。例えば、陸羯南の独創と考えられていた論説が、実は高橋健三の影響下に書き出されたものであったことを証明する、といった議論の立て方が考えられるだろう。

また、集団における思想形成の過程に配慮すれば、ある個人が集団に持ち帰った体験と構想は、組織が結束する契機を生み出すのみならず、他のメンバーとの齟齬を出させ、かえって組織が解体する契機を呼び込むこともあるのではないだろうか。本書は全体を通じて、国粋主義グループにおける国粋保存の発想なり、アジア結集をはかる地域秩序構想なりの「共有」の側面に関心を集中したため、時系列順に並んでいる各章の間での「変遷」あるいは「展開」の側面に対する検討が、間に日清戦争という大事件を挟んでいるにも拘わらず、弱い印象である。

これに関連して、気になったことの二点目は、本書で重視された海外体験、特にアジア体験に関して、その質と意義に対する著者の検討と解釈のあり方である。

国内海外を問わず、ある地域と人間との関係性については、①訪れた経験がない、②旅行や出張で訪れて短期間滞在した、③留学や仕事で訪れて一定期間居住した、④移住し長期間にわ

たつて生活した、⑤その地域の出身者で郷里だ、という五つのレベルがあると考えられる。そして一般的には、その地域との関係が深まるほど愛着も認識の度合いも深くなる一方、関係が浅い場合は理解が表面的なままに、本人の願望や思いこみが反映された偏った認識や、時には完全に誤った認識を生み出しやすい。

本書で論じられた時点では、五人の主人公のうち、第四章の陸羯南の場合は①のレベルで、朝鮮についての直接経験をもつておらず、第二章の志賀重昂と稲垣満次郎、第三章の高橋健三は②のレベルで、南洋や西洋との接触は短期滞在時に限られる。これに対して、③④のレベルでより深い海外体験があったのは、第一章の稲垣と第五章の内藤湖南であり、アジア地域に限れば台湾に赴任した内藤のみである。にも拘わらず、著者に従えば、内藤にはその土地でのいわゆる「異質な他者との出会い」からの新たな思想の形成が認められない。台湾における内藤は、その地で暮らす他者の「国粹」保持と発達に対する配慮の一切を欠いた。むしろ、接触レベルが低い第二章の志賀や稲垣の方にそうした配慮が認められる。これらの、地域と人物の関係性レベルの差については、より慎重に検討する余地があったのではなからうか。

発想や構想の「共有」でなく、「変遷」「展開」という角度からみてゆくと、第二章の志賀や稲垣の海外体験と第五章の内藤の場合とは、「異質な他者との出会い」の有無において明ら

かに性格が異なる。この差は一体何に由来したのだろうか。志賀や稲垣と、内藤のパーソナリティの違いに還元すればそれでよい問題なのか。それとも、ヨーロッパ人かアジア人かという訪問先で接触した相手の違いによるものであり、国粹主義グループ全体の思想傾向そのものは前後で変わっていないと理解するのか。あるいは、植民地領有の前か後かという時代の違いのせいであり、日清戦争を契機にグループの思想傾向も変化したと考えるのか。もちろんこれ以外にも、さまざまな検討と解釈の仕方があったように思う。

四

最後に。過去の人々の認識を考察対象とする思想史研究の場合、時代の限界を超え、現代にも通じる普遍性を備えた議論をおこなえた偉人や奇人の認識や構想のみではなく、現代から振り返れば、偏り、誤っていたと評さざるをえない、当時の常識人たちの認識や構想を相手とすることにも大きな意味がある。偏向や誤解を指摘して、「だから偽であり、悪なのだ」と見限るのはたやすい。そうではなくて、偏り、時に誤った情報に基づいて思想が形成されてしまう過程を、それはそういうものとして冷静に捉え返していこうという構えが、特に近代日本におけるナショナリズムやアジア主義と向き合う場合は肝心なのだと思う。抑制の効いた中川氏の語り口に触れ、あらためて、そう考えることができた。

著者の中川氏と評者とは、ともに一九七〇年代の後半生まれで同世代である。思い起こせば、この世代が学部生時代を過ごした世紀転換期当時は、新しい歴史教科書問題に象徴される歴史修正主義の聲が喧しかった一方、この動きに対抗して「ナショナル・ヒストリーを超える」「国境を越える」といった標語を掲げ、一国史観の超克を実現するための方法如何をめぐる議論も盛んだった。あれからおよそ二〇年。政治的ありきの歴史研究からは距離を置きたいと願いつつ、日本におけるナショナリズムとグローバリズムの来し方を冷静に見定めようと努めてきた、そういう研究者としての試行錯誤の道程は、あるいは著者と評者に共通のものなのかもしれない。今後の氏によつて研究がますます深められ、本書の続編となる論考が次々生み出されることを願う。

（東義大学校助教授）

水谷悟著

『雑誌『第三帝国』の思想運動』 ——茅原華山と大正地方青年』

（ベリかん社・二〇一五年）

神谷 昌史

近年の近代日本思想史研究において、雑誌メディアと関連したものは盛況を極めている印象がある。たとえばここ二、三年ほどで出版された成果として思いつくものを挙げてみても、佐藤卓己氏の編著を含めた著作（『図書』のメディア史——「教養主義」の広報戦略』岩波書店、二〇一五年、同他編『日本の論壇雑誌——教養メディアの盛衰』創元社、二〇一四年、同編『青年と雑誌の黄金時代——若者はなぜそれを読んでいたのか』岩波書店、二〇一五年）、雑誌を中心とした出版ジャーナリズムを対象とした大澤聡『批評メディア論——戦前期日本の論壇と文壇』（岩波書店、二〇一五年）、本誌第四五号に宇野田尚哉氏の書評が掲載された根津朝彦『戦後『中央公論』と『風流夢譚』事件——「論壇」・編集者の思想史』（日本経済評論社、二〇一三年）などをはじめ、数え上げるときりがない。

メディア史研究の進展が思想史研究にも波及しているからな